

## フローレンス ドワイヤー

グラスゴーを拠点に、陶器、テキスタイル、家具など様々なメディウムを用いて表現を行う。作品を通して建物や居住にまつわる力学を探り、その多くは、日常的に使われる衣類に隠れた物語を明らかにしたりモノの生産現場をあらわにしている。本プログラムにおいても、同様のリサーチと創作を中心に据えて、有田の陶器づくりをめぐる環境に焦点を当てた。

グラスゴーやロンドンでこれまで発表してきた作品の多くは、ものづくりの場に目を向けたものでした。様々な工場で作作をして、そうした環境で働く人々とともにどのように作品を作っていくか考えることは興味深い体験でした。これまでも陶器を扱ったことはありましたが、素材についての知識や技術が不足していました。有田に滞在を希望した大きな理由のひとつとして、一定期間、陶器というメディウムに専念して、工房や窯元などの場所で働く人々に会いたかったということでした。

有田に行く前、東京に2週間滞在しました。そこでは目に入る全てを理解しようとするのではなく、まずはその環境に身を浸し、イメージや物で頭の中をうめ尽しました。フリーマーケットやガラクタ市に足を運び、そこにある全てを見ることを試みました。そうすることで、人々の居住空間についての認識を理解できると思ったのです。特に大井競馬場フリーマーケットは、仕切りがなくあらゆるものが売られていてとても興味深かったです。また、日本民藝館では、職人や製作者の名前がわからない工芸品も収蔵し讃えるというその蒐集方針に感銘を受けました。

訪れたフリーマーケットでは、擦り切れ・染み・いたみなど、使われた形跡がある古い生地を多く集めました。また、スコットランドでも集めていた古くて小さな香水瓶を日本でも集めました。2018年、グラスゴーのThe Tenement Houseでプロジェクトをした際に、香水が半分残ったままの1940年代製の香水瓶を見つけました。その時から、こうした瓶に興味を持ち続けてきました。

有田でも、香水の流通と抽出法について考察しました。その中で、窯元の協同組合・十社でインターンをして、工場で働く女性スタッフと一緒に、窯入れ前に埃や汚れを取り除く作業をしました。きれいにするという儀式のような作業、そして家事と製造過程に共通点を



見出せたことはとても興味深かったです。それを経験した私は、化粧品を作る工場で働く女性たちを起用した1930年代の花王の石鹸広告を思い出しました。きっと、清潔さは女性によってもたらされるという考えの現れでもあるのでしょう。ここから、化粧品もしくはパーソナルケア用品に関する何かを作ろうと考え始めました。

十社での陶器製造を実際に体験した後、佐賀県窯業技術センターに移り、作業を始めました。釉薬や型作りの職人に話を聞きながら制作をしていたので、日々忙しく過ごしていました。浮かんできたアイディアを実現しようとした時、専門的な技術を持った誰かにいつも質問できる環境はとても貴重でした。

やがて、石膏型削盤を使ってどのようなものを作れるのか考えました。この機械は、作れるものやその大きさに限りがあります。そこで出来上がった石膏の模様は型を作るためのもので、それを利用して高さ7センチほどある7つの小さな香水瓶を作りました。いくつかのボトルデザインは、例えば古代ローマの香水フラスコ容器やノーマン・ヒートレイのデザインによるペニシリンを保管培養した容器、そして化粧品を通した日本と西洋との繋がりを見ることができ、資生堂の創業初期に作られた瓶の形を参照しました。

ここで制作した瓶は決して最終的な作品ではなく、機能的にも未完成です。素焼きされた陶器に顔料を直接吹きかける釉薬の実験は納得がいくものになりました。きめが粗くマットな表情に現れた色のグラデーションは、褪色した日本の建物のスチール外装壁を模したものです。こうした滞在の成果は、東京で行なったトークとプレゼンテーションのイベント「Greenware」で発表しました。Greenwareとは、窯入れ前の状態の陶器を指します。改装した伝統的家屋をイベントの会場にしたのは、香水瓶の特性やその背景を考え、親密かつ家庭的な空間で見せることが重要だったからです。有田の工房で見た陶器がそうだったように、瓶をひとつのコレクションとしてみせようと考えました。それぞれの作品には固有の背景や要素がありますが、すべて並べた時、建築的に見えたことは驚きでした。

有田で過ごした時間は、用いる素材と自分をどのように結びつけるかを考える機会になりました。スコットランドではそこまで考えることはなかったのですが、素材の歴史（また、そこに関わる労働の履歴）、なぜそれを使うことにしたのか、なぜ自分がそれにアクセスできたのかをよく考えることは重要です。有田が素材の豊かさを身をもって心からも教えてくれ、様々な思考や回路を開いてくれたように思います。日本に滞在した三ヶ月は写真であればスナップショットのようなもの。有田を本当に知るためには、数年は必要ですね。

## FLORENCE DWYER

The Glasgow-based artist works across mediums including ceramics, textiles and furniture. Her work is informed by investigations into the politics of building, making and inhabiting, often revealing stories hidden within the fabric of daily life and places of production. The acts of research and making were central to her residency, which focused on the broader context of Arita's porcelain wares.

A lot of the previous work I've done in Glasgow and London has been interested in manufacturing spaces. I've worked with different factories and enjoy thinking about how I can work with the people in those environments to create new work. I've worked with ceramics before but I'm not highly skilled with, or knowledgeable about, the material. One of the main reasons I wanted to visit Arita was to specialise in ceramics for a while and meet the people who work in the spaces, factories and workshops.

Before arriving in Arita, I spent two weeks in Tokyo. I absorbed things without really digesting them, filling my mind with images and objects. I went to any flea market or car boot sale I could find and tried to look at absolutely everything. One reason for this was trying to gain an understanding of people's living spaces. The Tokyo City Flea Market at Oi Racecourse was really interesting because the stalls weren't too composed and people were just selling anything and everything. I also enjoyed going the Japanese Folk Crafts Museum, where it was interesting how the objects have been acquired and how it celebrates the unknown craftsperson or maker behind them.

At the markets I collected a lot of used fabric: anything that had signs of use, wear, stains or damage. I also collected miniature used perfume bottles, which I have been doing in Scotland for a little while. This dates back to The Tenement House project I did in Glasgow in 2018, where I found a half-used bottle of perfume that had been preserved since the 1940s.

I continued thinking about the idea of perfume distribution and sampling in Arita. During my internship at the Jusha factory, I worked with a group of women in the cleaning section, wiping off any dust or dirt from the porcelain before its first firing. I found it really interesting to see the cleansing rituals and the overlap of domestic and factory-based tasks.



### Images

A Plaster maquettes before casting [Florence Dwyer]  
B, C Perfume bottles on display at *Greenware* [Yukiko Koshima]

It reminded me of the Kao soap adverts from the 1930s, which featured female factory workers producing cleansing products — possibly identifying women as the primary agents of hygiene. This led me to think about creating cosmetic objects or things used for personal care.

After gaining a hands-on insight into ceramic production at Jusha, I moved to a studio at Saga Ceramics Research Lab. My days were quite full-on because I was making things and constantly speaking to specialists such as glaze manufacturers and mould makers. There was always someone who could help with any idea you had, which was really amazing.

I chose one machine, the plaster lathe, that I wanted to get to know and then thought about the designs it could produce. The lathe dictated the limitations on the size and type of things I could make. The plaster patterns made on the lathe were used to create moulds, which I used to slip cast a collection of seven small perfume bottles, each about seven centimetres high. Some of the bottle designs reference shapes, such as scent flasks from ancient Rome; the culture vessel for storing Penicillin, designed by Norman Heatley; and bottles from the early Shiseido archive, which shed some light on Japan's connection to the west through cosmetics.

I don't see the bottles as a finished body of work and they're still not fully functional. I was happy with the glaze experiments, which involved spraying pigments directly onto the bisque porcelain. The textured, matte-style gradients recreated the faded steel cladding I saw on buildings in Japan. The residency culminated in *Greenware*, a talk and informal presentation in Tokyo. Greenware is the term used for ceramics prior to their first firing. Due to the nature of the perfume bottles and their associations, it was important to show the works in quite an intimate and ideally domestic setting, which is why we used Oldhaus, a refurbished traditional Japanese house. I wanted to display all of the bottles as a collection, much like the way I saw ceramics within factories in Arita. Although each piece contains details of its own, I was surprised to see how, when viewed together, they become almost architectural.

My time in Arita made me think about my connections with the materials I work with. I didn't think about it too much in Scotland, but I need to make sure that I really think about a material's history (and history of labour), why I chose to use it and why I am able to have access to it. I feel like Arita's given me a wealth of material, both physically and mentally, to work with and it's opened up lots of thoughts and avenues. Three months is just a snapshot, I think you'd need years to really get to know Arita.



# ステイシー ハンター

エジンバラを拠点にデザイン・キュレーター、ライター、プロデューサーとして活動し、2015年にスコットランドのデザイン振興を目的とした「Local Heroes」を設立。翌年、スコットランドにおける新しいイノベーションや建築、デザイン分野を讀める年間行事の一環として、旅をテーマにした土産物（スウェーデン）のプロジェクトを開始。以降、土産物に関心を寄せ続け、この滞在の中心テーマとなった。

デザイナーとして、有田の美しい家屋に滞在できたことは夢のような体験でした。伝統的な民家の内装は洋風に改装され、食器棚には400年の歴史ある有田焼に新たな解釈とデザインを持って再構築した「2016/」ブランドの食器が並んでいました。有田滞在の最初の1週間、フローレンスと私は、素晴らしい陶芸家や職人たちと出会い、その後、工房でインターンシップを行いました。

滞在時にはまた、縁側に広がる庭を眺めながら、これまで取り組んできた土産物のプロジェクトについて、そしてその様々な意味について考える有意義な時間を持つことができました。旅をすると、空間や時間をいつもとは違う形で過ごし、多くの刺激を受けることになります。足を止め、誰かのために何かを買うおとすとき、重要なのはそのモノではなく、例えば「そこであなたについて考え、いつもあなたのことを思っています」と言葉にすることでもあります。それは、強く感情に訴えかけられると思います。

有田は陶磁器生産地として、通りには土産物屋が立ち並ぶのどかで小さな町です。滞在当初、これらの店が営業しているにも関わらず、なぜ店内に客がいなかったのか分かりませんでした。あとで聞くと、繁盛期もありますが、商売の多くは業者を通して行われ、お店は自分たちの商品を展示するショーケース的な役割をしているとのことでした。そこで、並んでいる陶磁器について、なぜそれが人の目を惹きつけるのか考えるようになりました。

それから私は、土産物の理想的な特徴をひとつひとつ挙げていきました。それは手の中に収まるサイズでなければならないこと、カバンに入れても邪魔にならない軽さで、（国を越えて）家に持ち帰るため壊れない強度を持っていること。また、素材や製造過程において、

ある種の地理的要素を含んでいること。時には純粋に「カワイイ」だけでもよく、その場合、作りが粗野だったり安かったりするのは関係ありません。どちらにせよ、買ってしまうのですから。

2018年、National Health Serviceの助成による  
New Media Scotlandでのレジデンス滞在で  
は、お守りや入院した時に贈られる物につ  
いてリサーチを行いました。その中には、ただ  
眺めるだけで気分が明るくなるようなものか  
ら特別な特性が備わっているものまでありま  
す。日本では、私の土産物とお守りに対する関  
心は、お寺や神社を訪ねることでひとつに融  
合されていきました。神社仏閣は信仰の場で  
ありながらも押しつけがましくなく、誰にで  
も開かれ心静まる環境に魅せられました。素  
晴らしいデザインが施された物、例えばジグザ  
グに折り込まれた紙垂（しで）や運勢が書か  
れたお守りやおみくじなどもあります。人生  
の浮き沈みや感情とデザインが、このような関  
わり方を結ぶことに感銘を受けました。

有田は地方都市ですが、洗練された場所で、なおかつ世界有数の高い技術で作られる陶磁器の町でもあります。佐賀県の端に位置し、高級店が立ち並び東京からは遠く離れています。それは、イギリス、そしてヨーロッパの端に位置するスコットランドともよく似ています。スコットランドの文化は、まだまだ語るべきことがあるにも関わらず、表層的な部分だけが切り取られて紹介されており、その点において、このレジデンスプログラムを通して滞在したことから何かが得られるはずです。

「2016/」ブランドマネージャーの陣内裕子さんに会えたのは幸運で、国際的なデザインメディアにおいて、私たちが伝えようとするストーリーを持ち込むことについて話しました。グローバル化が進んだことを発端に、人は「Local Heroes」や「2016/」など、特定の場所からある関心層に向けて発信されるプロジェクトについて感受性を備えています。国際的なマーケティングにおいては、均質ではないという理由で特異性は受け入れ難いものです。しかし、私たちのプロジェクトが引き出したのは、実際に顔が見える人たちによる、そこにある物語です。だからこそ、デザインされたプロダクトだけではなく、人はそこに惹かれていくのです。そこには工芸にまつわる製造過程や素材、職人や関わる人たちについて知りたいという欲求があります。

日本に來られたこと、そしてあらゆる時代のデザインに囲まれるのはとても刺激的です。有田での滞在を挟んで2週間ずつを東京で過ごし、全く違うふたつの日本を見ることができて幸運でした。東京は視覚的な刺激にあふれ、いろいろなものが凝縮し、高揚感も高まります。かつて遊郭があった場所で立ち上がったデザインプロジェクト「新吉原」も斬新で、21\_21 DESIGN SIGHTで開催された「民藝 MINGEI -Another Kind of Art」展にも圧倒されました。東京では洗練されたデザインの展覧会を見て、有田ではデザインの過程を身をもって経験しました。この滞在を終えて、陶磁器を見つけるたびに私は一つ一つ手に取り、注意深く観察しています。まさしく、有田の人々がそうしていたように。

CURATOR INTERVIEW

# STACEY HUNTER

Based in Edinburgh, the design curator, writer and producer founded Local Heroes in 2015 to promote Scottish design. The following year, she launched the project with a line of travel-themed souvenirs for Scotland's Year of Architecture, Design and Innovation. Since that time, souvenirs have remained an area of interest and were a key focus of her residency.

As a designer, it was surreal to stay in such a beautiful house in Arita. The traditional house has a renovated European interior, while the cabinets are filled with 2016/ brand Arita porcelain. After arriving in Arita, Florence and I spent our first week meeting master craftsmen and some amazing characters, and later did an internship at one of the porcelain factories.

I also had the luxury of staring at the Japanese garden behind the house and thinking about souvenirs and their different definitions. When you travel, you move through space and time differently and so a lot of stimulus comes your way. When you stop to buy something for another person, the significance sometimes isn't really the object at all, it's that you're saying to that person, "I was thinking about you in this place. You were on my mind." I think that's really powerful.

Arita is an idyllic little town with a porcelain district and streets lined with souvenir shops. At first, I couldn't quite work it out because the shops were open but there weren't any customers. People explained that although there are busy times, most traders sell through distributors and so the shops are like showcases for their products. I started thinking about all of the little objects on display and why one might catch your eye.

I made a list of the ideal characteristics of a souvenir. It should be small enough to fit in your hand, light enough to carry in your handbag and robust enough to make it home safely. It should also have some kind of geographical context in its materiality or method of construction. Sometimes it can simply be 'kawaii' (cute), that way it doesn't matter if it's badly made or cheap — you'll buy it anyway.

During my 2018 residency with New Media Scotland, funded by the NHS (National Health Service), I explored the idea of amulets and the things that people are given for their hospital stay. Some things make you feel better simply by looking at them, while others have special intrinsic properties. In Japan, my interest in souvenirs and amulets blended together through visits to temples and shrines. I loved the open-minded, accepting and calm environment there — it's religious, but not oppressive. There's also an abundance of amazingly designed objects, from the zig-zagging paper 'shide' to the amulets themselves, which come with a prediction of your fortune. I'm fascinated by how design can engage with emotions and the highs and lows of life.

Arita is a rural town, but it's very sophisticated and produces some of the world's most technically progressive porcelain. It's positioned on the edge of Saga prefecture and the island of Kyushu, far away from the fancy shops in Tokyo. Scotland is very similar, as it's positioned on the edge of the United Kingdom and

Europe. I think there's something to be gained from this and the fact that people don't know much about our cultures — except for the superficial parts — because it means there are new stories to tell.

I was lucky to meet Hiroko Jinnouchi, the brand manager of 2016/, and we talked about engaging with the international design media and using our narratives. People have become so used to globalisation that they are now very receptive to projects, such as Local Heroes and 2016/, that respond to a specific community from a specific place. In a global marketing context, specificity is bad because it's not homogenous. However, our projects pull out real people and real stories — that's what people buy into, as much as the actual design products. The public has a strong appetite for learning about craft processes, materials and people.

It's fascinating to come to Japan and see 100 years of design around you. I was fortunate to book-end my time in Arita with two weeks either side in Tokyo, so it was nice to see the polar opposites of Japan. There's so much visual stimulation in Tokyo and you get such a rush from being in a high density place. A highlight was Shin Yoshiwara, a brilliant design project and souvenir shop in a former red-light district, and I was also awestruck by the 'Mingei - Another Kind of Art' exhibition at 21\_21 Design Sight. In Tokyo I saw sophisticated design exhibitions, and in Arita I saw sophisticated design processes and participated in a really physical way. Now, whenever I see porcelain I pick up each piece and inspect it closely — just like the people in Arita.



**Image**  
D Assorted amulets collected on travels in Arita and further afar [Stacey Hunter]

# PARTNER ORGANISATIONS

## TOWARDS A SCOTLAND-JAPAN CONSORTIUM

This residency programme was built upon an international collaboration between AIT, CRA and the international residency organisation Cove Park, located in Argyll and Bute, Scotland. Representatives from each organisation reflect on the programme and share their impressions and comments.

本プログラムは、AITとクリエイティブレジデンシー有田に加えて、スコットランドのアーガイル・アンド・ビュートを拠点とするレジデンス機関コーヴ・パークとの国際的な協働関係の構築が原動力となって進行しました。ここでは、各団体より、プログラム作りに関わったそれぞれの経験を紹介します。

### ARTS INITIATIVE TOKYO [AIT]

Shintaro Tokairin  
Project Manager

AIT is a non-profit arts organisation based in Tokyo since 2001. Our ethos is about nurturing radical bottom-up programmes to disseminate and encourage art for broad audiences through an education programme, residency programme and curatorial/consultancy projects with various partners.

It has been our pleasure to delve further into ideas, raised by previous artists in residence, relating to art and craft in the current cultural landscape. We are grateful to have had CRA and Cove Park as partners and learned that such a collaboration has the potential to expand the residency's role and framework in the future. The programme deepens the exchange between artists, curators and partners, while encouraging mobility and networks beyond the programme year — creating a base for new works and ambitious projects in the future.

東海林慎太郎  
プロジェクト・マネージャー

エイトは、現代アートを考えるさまざまな「場」をつくるため、2001年に設立したNPOです。国内外のアーティストやキュレーター、企業や財団と連携して、教育プログラム・レジデンスプログラム・アートプロジェクトのキュレーションやコンサルタントを行っています。これらの事業を通じ、現代アートの複雑さや多様さ、驚きや楽しみを伝えています。

これまでのレジデンスプログラムでアーティストが共有した、現代におけるアートと工芸にまつわる思考を引き継ぎ、ここで掘り下げられたことは有意義に思います。CRA、コーヴ・パークと協働できたことにも感謝しています。この経験から、こうした協働はレジデンスプログラムの役割と枠組みを広げる可能性を持つことを学びました。また、複数年に渡って、アーティストやキュレーター、プログラムに関わった人びとが紡ぎ出す国を越えた人的交流の発展と、そこから生み出される新たな作品やプログラムの胎動を今後も期待します。

### COVE PARK

Alexia Holt  
Associate Director

Cove Park is an artists residency centre located on an outstanding rural site on Scotland's west coast. For Cove Park, this programme has also allowed us to develop further our relationship with AIT and to create a new partnership with CRA. We would like to thank both organisations for their support and commitment, making possible two long-term residencies for the Scottish designer/maker Florence Dwyer and design curator Stacey Hunter. We are confident these residencies will have a lasting impact upon the work of both Florence and Stacey, and look forward to seeing new projects evolve as a direct result of their experiences in Japan.

Followed by this year's collaboration with AIT, Cove Park is thrilled to have this opportunity to work with all the partners here in Scotland and in Japan to develop a new Scotland/Japan residency exchange programme in 2019 and 2020, and would like to thank Edinburgh Sculpture Workshop, Hospitalfield, AIT, ARCUS Project and Tokyo Arts and Space for their participation.

アレクシア・ホルト  
アソシエイト・ディレクター

コーヴ・パークは、スコットランド西部の海岸沿いにあるレジデンス施設です。このプログラムを通してAITとの関係性を更に深め、新たに佐賀県有田町のCRAと新たな協働関係を結ぶことが出来ました。フローレンス・ドワイヤーとステイシー・ハンターの充実したレジデンス滞在をサポートしてくれたことに感謝します。日本での経験は、二人にとって今後の活動にダイレクトな影響を与えていると思います。

また、この経験をもとに、2019年から2020年にはスコットランドにあるエジンバラ・スカulptチャー・ワークショップ、ホスピタルフィールドと連携して、日本ではアークスプロジェクト、Tokyo Arts and Spaceも参加する交換レジデンスプログラムが行われることを嬉しく思います。

## CREATIVE RESIDENCY ARITA [CRA]

Yoriko Ishizawa  
Program Director

Creative Residency Arita was launched with the sponsorship of Saga prefecture in 2016. With ceramic production as its focal point, the programme offers support for creators from various backgrounds and specialisms to have the opportunity to interact and artistically collaborate with local residents, highly skilled potters and craftsmen. In this collaboration with AIT and Cove Park, CRA fostered the residency to introduce diverse culture such as the history of Arita ware, skilful craftsmen, the latest technology and recent design projects, all of which have carried its fertile culture to this day, alongside the facilitation of a public talk and workshop. We were invited to Scotland to meet Alexia and discuss the programme with everyone involved. We also learned about the Scottish residency scene in a more in-depth manner.

We certainly look forward to hearing how both Stacey and Florence saw the cultural landscape of Arita and how it will be brought into their practices. The programme has been a tremendous learning experience, with each organisation having shared resources from its unique and different context. CRA only has three years of experience since its inception and we hope to nourish and develop our future programmes out of this collaboration.

石澤依子  
プログラム・ディレクター

クリエイティブ レジデンシー有田は、佐賀県が2016年より取り組むレジデンスプログラムです。陶磁器の有田焼産地における滞在型創作活動を支援するため、窯元・職人・技術者や住民との交流を通じたコラボレーションの機会を創出しています。AITとコーヴ・パークと協働した本プログラムは、有田焼の歴史、今に続くものづくりの潮流と最新の技術、近年のデザインプロジェクトなど多様な有田の陶磁器文化を紹介しながらふたりの滞在をサポートしたほか、トークやワークショップも企画運営しました。実際にコーヴ・パークを訪れて関係者と意見交換を行い、レジデンスにまつわる現地の状況も知ることができました。

日本や有田独自の文化と風土を経験した両者が、どのように今後の活動に発展させるのか期待しています。この協働では、東京と有田の異なる環境を生かして双方のリソースを共有したことに大きな学びがあります。プログラム開始から3年というCRAの経験値を、この協働を糧に、今後も積み重ねていきたいです。





#### Images

- E** Launch event of the Scotland-Japan Residency Exchange Programme, October 2018 [Alan Dimmick, courtesy of Cove Park]  
**F** The town of Arita [Kenta Hasegawa]  
**G** Talk by Stacey Hunter [Hiroshi Ishimaru]  
**H** Workshop at Saga University by Florence Dwyer [Hiroshi Ishimaru]  
**I** Residency house in Arita [Stacey Hunter]

## SCOTLAND-JAPAN RESIDENCY EXCHANGE PROGRAMME 2019

This publication introduces the 2019 residency programme, initiated by Arts Initiative Tokyo [AIT], that saw artist Florence Dwyer (Jan 9~Mar 19) and design curator Stacey Hunter (Jan 9~Mar 5) spend time in both Tokyo and Saga prefecture. It presents the thoughts and ideas they developed through research, creation and various other experiences. Built upon a close collaboration with Creative Residency Arita (CRA), an organisation based in the porcelain town of Arita, it captures the trajectory of AIT's first multi-location programme in Japan.

本冊子は、2019年にAITのレジデンスプログラムでスコットランドから招聘したアーティストのフローレンス・ドワイヤー（1/9-3/19滞在）とデザインキュレーターのステイシー・ハンター（1/9-3/5滞在）が東京と佐賀で滞在した経験と、リサーチや制作を通して新しく紡がれた思考をまとめたものです。陶磁器の産地である佐賀県有田町でレジデンスプログラムを発足させたクリエイティブレジデンス有田との密接な協働のもと、国内の二つの拠点を横断したAIT初のプログラムの軌跡が綴られています。

Partner Organisations



Supporting Agency



Editor: Ben Davis

Translator: Futoshi Miyagi

Designer: The White Paper

Printer: Graphic Corporation

Publisher: Arts Initiative Tokyo [AIT]

B403, Twin Building Daikanyama

30-8 Sarugakucho, Shibuya, Tokyo 150-0033

Tel: 03-5489-7277 / otoiwase@a-i-t.net

<http://www.a-i-t.net>

Published on March 31, 2019